

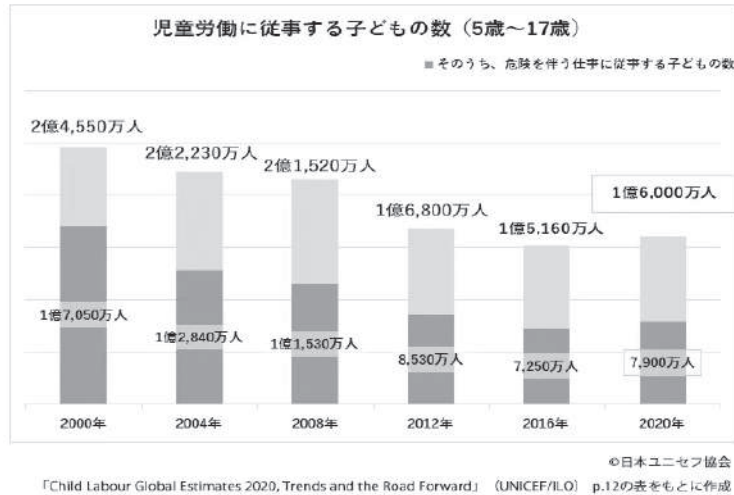
令和7年度 西九州大学短期大学部【一般選抜「Ⅱ期」A方式】入学者選抜試験問題（総合問題）

I 以下の文章を読んで設問に答えなさい。

世界には、有給、無給に関わらず、さまざまな形態で働いている子どもたちが多くいます。

2021年6月、UNICEFとILOが発表した新しい報告書『児童労働：2020年の世界推計、傾向と今後の課題』によると、児童労働に従事する5～17歳の子どもは、2020年時点で約1億6,000万人おり（表1）、世界の子どものおよそ10人に1人に相当します。

表1



以下は、アフガニスタンのサルマンさん（11歳）が、命がけの危険な児童労働に従事する様子をレポートした記事です。

アフガニスタン・パキスタン国境

命がけで商品を運ぶ子どもたち

アフガニスタンとパキスタンとの国境にある小さな町、トールハムは、貿易や仕事、チャンスを求める人々であふれています。花柄や幾何学模様に彩られたカラフルな貨物トラックが国境に停車し、次の国へ向かってゆっくりと走っていきます。トラックは様々な商品を運びます。ときには、幼い子どもたちをも。

毎日、何十人もの子どもたち（中には8～9歳も）が、国境を警備する当局に捕まらないようトラックの下に隠れながら、商品の入った袋を手に持ち、命がけで国境を越えています。子どもたちは、タバコや手作りの商品、果物などを運びアフガニスタンで売ること、家計を助けているのです。

子どもたちが運ぶ商品は、「ガンディー」と呼ばれる袋に入っています。ガンディーは、ビニールや防水シートの切れ端を用い、肩ひもとしてロープを結び付けてリュックに仕立てたものです。大きさは子どもたちの背と同じくらいあり、重くて運びにくいものがほとんどです。

サルマン（11歳）は、叔父の携帯電話の画面に写る弟の写真を見ながら、つらい過去を思い出します。

「これはハイダル」とサルマンが話し始めました。「ハイダルが9歳だったある日、トラックの下でガンディーを持ちながら、元気に“バイバイ”って手を振ったんだ。その5分後、ハイダルはつかまっていたトラックから落ち、タイヤにひかれてしまいました。

「もう二度と国境を越えたくない。弟のようになりたくない」。

サルマンは、それ以上弟の話を続けることができず、テントに戻って泣き出しました。

ハイダルのような何千人もの子どもたちが、家計を助けるために命の危険を冒して働いています。国境を越えて商品を運ぶ仕事から得られる収入は、1袋あたり2ドルから4ドルです。

「2022年3月に行った調査によると、2,500人以上の子どもたちがトールハム国境において、このような危険な児童労働に従事しています」と、UNICEFの子どもの保護担当官アジズ・ノールは話します。

（UNICEF HP 子どもたちのストーリーを読む「児童労働」

「6月12日は児童労働反対世界デー」を元に一部改変）

問 1.本文中の「UNICEF」と「ILO」は国際機関の略称である。それぞれの正式名称として正しいものを選択肢から選びなさい。

- ア 国連児童基金 イ 国際労働機関 ウ 国際連合教育科学文化機関
エ 国際移住機関 オ 世界保健機関

問 2. 2020 年時点の世界の子どもはおよそ何人か。本文ならびに表 1 に記載された情報を活用して求めなさい。

問 3. 2000 年から 2020 年までの児童労働に従事する子どもの数の推移について、問題文中の表 1 を参照しながら、具体的な数値を挙げて説明してください。

問 4 現在のアフガニスタンの社会情勢として、適切な説明を以下の選択肢から 1 つ選びなさい。

- ア ロシアがアフガニスタンに軍事介入し、自らが後ろ盾となる政権を樹立。社会の急速な共産主義化が進められている。
イ 内戦状態に突入し、市街戦が繰り広げられ、略奪や女性に対する暴行が横行し、治安が乱れに乱れている。
ウ アルカイダのビンラディン容疑者の拠点を提供する代わりに、資金的な支援を受けている。
エ 正式な国家承認をしている国が存在しないにもかかわらず、さまざまな国や国際機関との外交を展開している。

問 5. アフガニスタンのサルマンさんの事例を読み、以下の 2 点について、あなたの考えを簡潔に述べなさい。

①児童労働の原因として考えられるものは何か。

②児童労働を防ぐために必要な支援として、どのようなことが考えられるか。

Ⅱ 次の本文について問いに答えなさい。

令和3年10月20日現在で実施した「令和3年社会生活基本調査」の結果が総務省統計局から公表されました。これは、佐賀県の概要の一部を抜粋したものです。

社会生活基本調査は、国民の生活時間の配分及び自由時間における主な活動について調査し、国民の社会生活の実態を明らかにすることを目的としたものです。この調査は、総務大臣が指定する131調査区（全国では7,576調査区）の中から無作為に選定した約1,600世帯（全国では約91,000世帯）に居住する10歳以上の世帯員を対象としたものです。

主な用語の解説

1次活動・・・睡眠、食事など生理的に必要な活動

2次活動・・・仕事、家事など社会生活を営む上で義務的な性格の強い活動

3次活動・・・1次活動、2次活動以外で各人が自由に使える時間における活動

行動者数・・・過去1年間（令和2年10月20日～令和3年10月19日）に該当する種類の活動を行った人（10歳以上）の数

行動者率・・・10歳以上人口に対する行動者数の割合（％）

家事関連活動・・・2次活動のうち、「家事」、「介護・看護」、「育児」及び「買い物」

自由時間活動・・・3次活動のうち、「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」及び「休養・くつろぎ」を休養等自由時間活動、「学習・自己啓発・訓練（学業以外）」、「趣味・娯楽」、「スポーツ」及び「ボランティア活動・社会参加活動」を積極的自由時間活動と定義している

Ⅰ．生活行動に関する結果

1．学習・自己啓発・訓練

行動者率は37.2％で5年前より3.5ポイント上昇。全国平均よりも2.4ポイント低くなっている。男性は「（1）」の行動者率が最も高く、女性は「（2）」の行動者率が最も高くなっている。

過去1年間（令和2年10月20日～3年10月19日。以下同じ。）に何らかの「学習・自己啓発・訓練」を行った人（10歳以上）は26万1千人で、10歳以上人口に占める割合（行動者率。以下同じ。）は37.2％となっている。全国平均（39.6％）と比べると（3）ポイント低くなっており、全国順位は14位となっている。男女別にみると、男性は37.8％、女性は36.7％で、男性が女性より1.1ポイント高くなっている。

行動者率を平成28年（33.7％）と比較すると（4）ポイント上昇している。これを男女別にみると、男性は（5）ポイント、女性は（6）ポイント上昇している。

行動者率を種類別にみると、「パソコンなどの情報処理」が（7）％と最も高く、次いで「（8）」が15.0％などとなっている。平成28年と比べると、「パソコンなどの情報処理」及び「家政・家事」でそれぞれ（9）ポイント上昇するなど、「芸術・文化」及び「その他」を除く全ての種類で上昇している。（図1－1）

種類毎に男女別の行動者率をみると、男性は「パソコンなどの情報処理」が（10）％と最も高く、次いで「人文・社会・自然科学」が10.7％となっている。女性は「（11）」が19.2％と最も高く、次いで「（12）」が12.5％などとなっている。（図1－2）

図 1－1 「学習・自己啓発・訓練」の種類別行動者率（令和3年、平成28年）

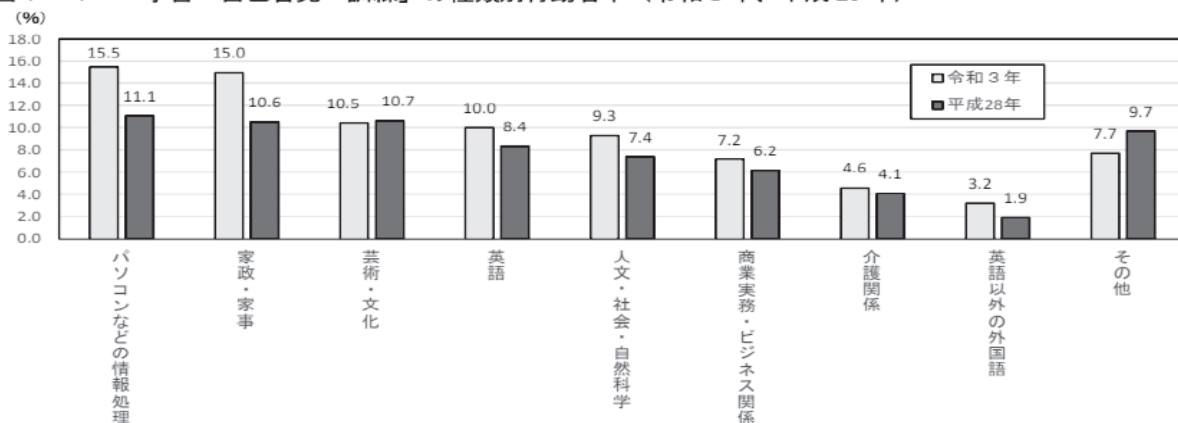
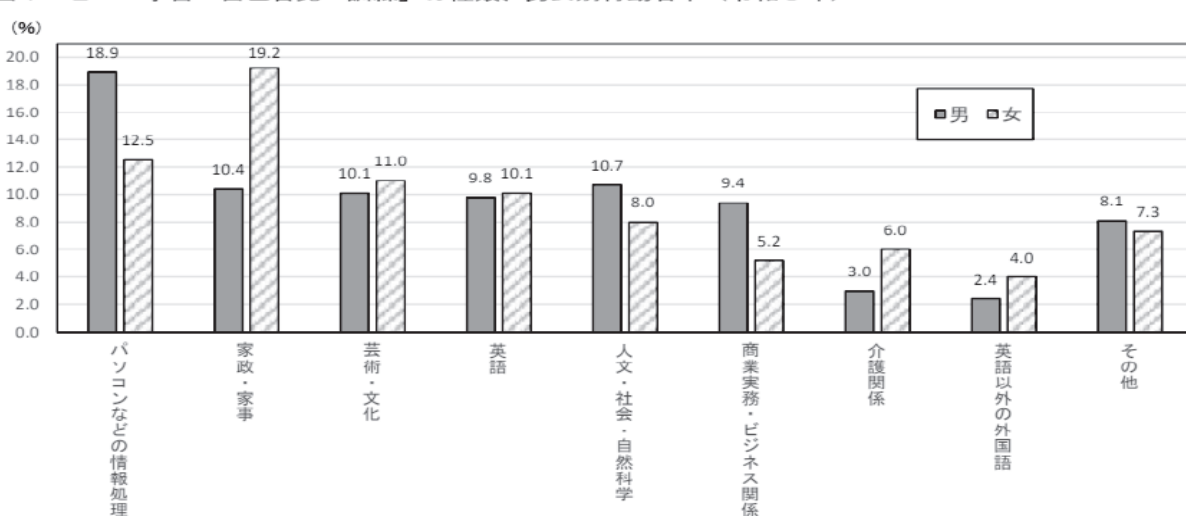
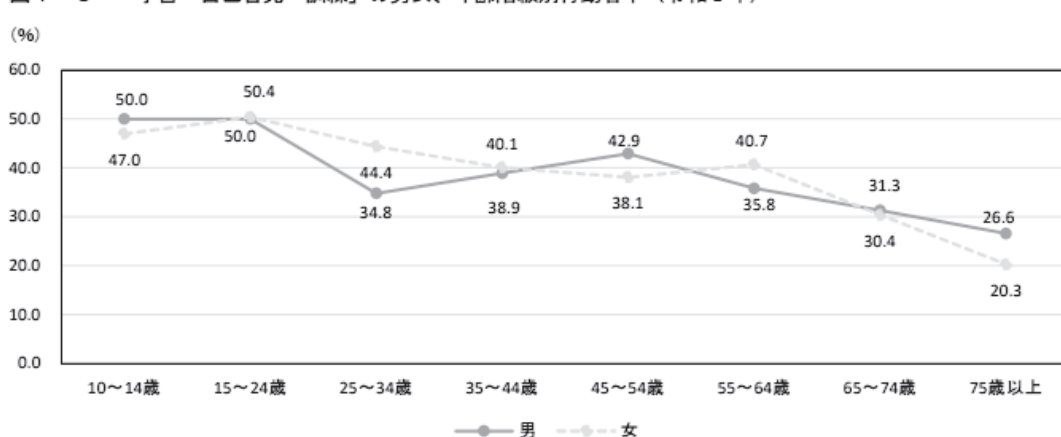


図 1－2 「学習・自己啓発・訓練」の種類、男女別行動者率（令和3年）

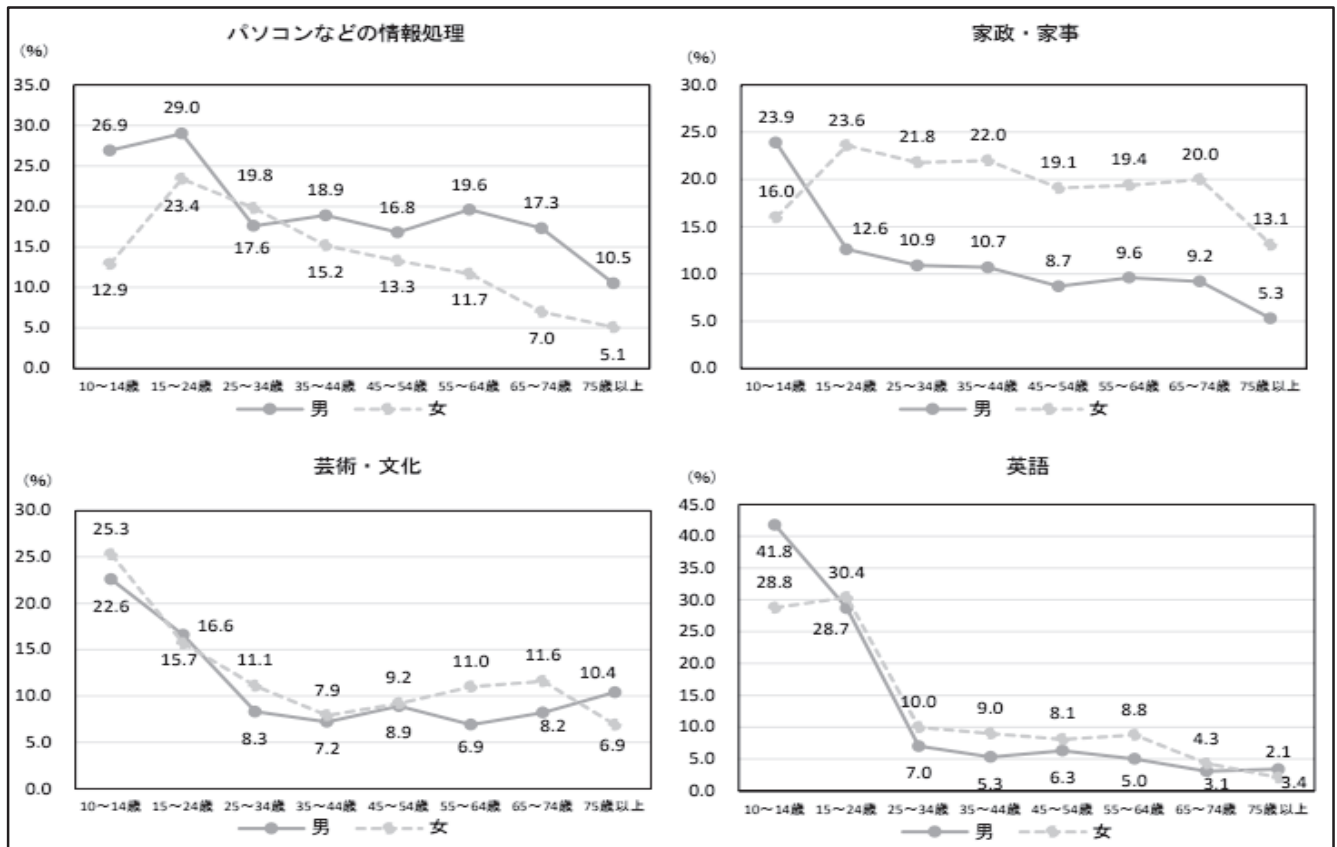


男女及び年齢階級別にみると、25～34 歳で女性の方が（13）ポイント高く男女差が最も大きくなっている。（図 1－3）

図 1－3 「学習・自己啓発・訓練」の男女、年齢階級別行動者率（令和3年）



また、種類別にみると、「（14）」は 10～14 歳を除く全ての年齢階級で女性の行動者率が高くなっており、そのほかの年齢階級では、男女で大きな開きがある。（図 1－4）



7 スマートフォン・パソコンなどの使用状況

(1) スマートフォン・パソコンなどの使用割合

スマートフォン・パソコンなどを使用した人は男性で 24 万 6 千人、女性は 26 万 3 千人で、人口あたりの使用した人の割合（以下、「使用割合」という）は、男性が（ 15 ）％、女性が（ 16 ）％となっている。

男女別、年齢階級別にみると、男性では 20～24 歳及び（ 17 ）歳、女性では（ 18 ）歳の使用割合が最も高くなっている。（表 7－1）

表 7－1 男女、年齢階級別スマートフォン・パソコンなどを使用した人の割合(令和 3 年) 一週全体
(単位 ٪)

佐賀県	佐賀県			全国		
	総数	男	女	総数	男	女
総数	72.3	73.7	71.5	76.1	78.1	74.2
10～14歳	69.2	65.0	73.7	71.5	70.1	72.9
15～19歳	87.2	85.0	84.2	89.7	90.4	89.0
20～24歳	91.4	94.1	83.3	90.7	90.3	91.2
25～29歳	91.2	94.1	88.2	89.3	89.8	88.7
30～34歳	83.8	88.9	78.9	87.3	87.6	86.9
35～39歳	84.4	77.3	91.3	85.1	85.1	85.0
40～44歳	81.6	79.2	88.0	85.5	85.6	85.5
45～49歳	84.9	80.8	88.9	85.7	85.6	85.8
50～54歳	80.0	83.3	76.9	84.6	84.2	84.9
55～59歳	78.7	78.3	76.0	83.7	84.1	83.3
60～64歳	78.8	76.0	77.8	79.3	79.0	79.5
65～69歳	70.7	67.9	70.0	72.6	73.9	71.4
70～74歳	61.3	62.1	60.6	61.5	64.0	59.4
75～79歳	39.5	50.0	36.4	52.9	57.2	49.4
80～84歳	35.5	38.5	36.8	43.6	50.0	38.9
85歳以上	20.6	18.2	22.7	31.1	36.2	28.3

(2) スマートフォン・パソコンなどの使用時間

男女別にスマートフォンやパソコンなどを使用した人の使用時間をみると、男女ともに1～3時間未満が一番高くなっている（男性：27.8%、女性：36.0%）。3～6時間未満が男性では（19）%、女性では22.5%で、2番目に高くなっている。なお、12時間以上使用している人の割合は男性で（20）%、女性では5.4%となっている。（表7－2）

表7－2 男女、スマートフォン・パソコンなどの使用の有無、使用時間別の人数及び構成比（令和3年） 一週全体							
（単位 %）							
	使用しなかった	使用した	1時間未満	1～3時間未満	3～6時間未満	6～12時間未満	12時間以上
総数	27.7	72.3	13.0	32.0	24.8	21.8	8.4
男	26.7	73.7	9.1	27.8	27.3	24.4	11.5
女	28.8	71.5	16.2	36.0	22.5	19.8	5.4

注1）使用時間別の構成比については、使用した人における割合（使用時間不詳を除く）。

注2）ここでいう「スマートフォン・パソコンなど」とは、スマートフォン・パソコンのほか、携帯電話やタブレット型端末を含む。ゲーム機や携帯音楽プレーヤーは含まない。ここでいう「使用」とは、移動中にスマートフォンを使用して音楽を聴いたり、仕事中にパソコンを使ったりするなどの使用をいう。睡眠中など、「操作する、見る、聞く」といった意識をしていない場合は含まない。

出典：令和3年社会生活基本調査 佐賀県の概要

- 問 1. 本文中の空欄（1）～（20）を埋めなさい。
- 問 2. この調査の目的と具体的な目標は何か、簡単に説明しなさい。
- 問 3. 本文の内容から分かったことや考えられることをまとめなさい。